

# 『大徳寺夜話』をめぐって (三)

— 研究ノート (上) —

## 飯塚大 展

一、はじめに、

『大徳寺夜話』は、室町時代中期以降において大応派徹翁派下（大徳寺派）の主流を為した養叟宗頤派下の記事を多く載せる資料として貴重である。一休宗純の著作である『狂雲集』や『自戒集』には養叟批判の記事が、激越な罵倒の語によって表現されている。今までもすれば、一休の著作に見られる養叟批判の記事によって評価されることが多かったと言える。これは後に一休が圧倒的な人気を博するに及んで以降、その評価は定着していった。養叟の評価は、大徳寺派内においては、一休のそれとは異なっていたように思われる。

大徳寺の歴史から言えば、養叟の時代は、五山叢林とは異なる、隣下（林下）の立場を鮮明にし、徹翁派の徒弟院として一流相承が企図された時代であるとも言える。しかしながら、徹翁派一流による相承は、養叟宗頤、春浦宗熙、実伝宗

真等の時代において、必ずしも遵守されていないのであり、きわめて流動的なものであった。養叟が、大徳寺の主流派として地歩を固めつつあるとき、徹翁派下内での主導権争いは、大模派との勢力均衡から、養叟派優位へと推移する過程にあったと思われる。ほかにも、養叟派下にとっての競合する派としては、峰翁祖一の弟子である月菴宗光とその派下も視野に入っていたと思われる。しかしながら、養叟派下にとって最大の脅威となったのは、関山慧玄派下（妙心寺派）の大徳寺晋住であった。このような状況下において、養叟にとつての一休とは、上記の対抗勢力ほどに大きな存在ではなかったと想像される。

## 二、一休宗純への批判

一方で、養叟にとつて一休は必ずしも完全に無視できる存在でもなかったことは、『大徳寺夜話』においても、その批

判的な記事が存在することから推察できる。

(116) 一、一休ハ、古則八十則ナラテハ、参セスト云レタ、碧岩三十則参タ、其支證ハ、人ニ碧岩三十則書テ出タ、此内ヲ問ト也、養叟ハ、一休ノ風顛漢ヲハ不嫌、師家ニ不問古則推着テ、心得類ヲスルヲ嫌タ也、(『夜話』)

(※『大徳寺夜話』の番号は、筆者の論稿整理番号による)。

一休が参得したとされる「古則八十則」、「碧岩三十則」は、いかなるものであつたかは不明である。しかしながら、管見の大徳寺派系密参録資料によれば、『臨濟録密参録』、『碧巖録密参録』、『百五十則』(『百則』、『五十則』の二つに分けて参究される場合もある)、『碧岩類則密参録』、『雲門録密参録』、『大燈国師百二十則密参録』、『雜則密参録』(全八冊)等の密参録、室町時代後期から江戸時代初頭にかけて成立しているように思われる。どれほどの公案を参じて大悟したかを示す記事が『碧岩類則密参録』(駒澤大学図書館蔵)に見られる。

○建長大應国師者、廿五歳ニシテ入唐、随侍虚堂七年而嗣法、此年国師廿一歳ノ時也、

○開山大燈国師、随侍大應国師五年、参学百八十則ニテ罷参、五十六歳ニテ遷化、

○靈山大現国師者、大燈ニ参八十則了畢大事、

○養叟和尚者、華叟ニ参八十則罷参、

○大模、参別傳、法嗣言外イヘ共、言外ニハ半句ヲモ不問、

○春作者、自云、纔四五ヲ参テ了畢ト、大聖国師ノ沙汰也、

養叟が積極的に俗人に入室参禅を許可し、得法を教えていることに対する批判は、『自戒集』において繰り返し行われていることであるが、一方でこの時代は居士の参禅が盛んな時期にあたり、その活動が『大徳寺夜話』や大徳寺派系密参録・語録抄などに比較的多く見られる。以下に養叟に参じた慶雲善居士と惠深居士についての記事をあげれば以下の通りである。

(33) 一、善居士問大照禅師、我昔ハ大俗ノ故ニ、家ヲ作り、妻子ヲタスク、和尚ハ因<sup>レ</sup>甚寺ヲ結構スル。

師云、汝等カ造作ハ、造作ニテヲトル、老僧カ造作ハ、非造作、掃絶<sup>ノ</sup>クルソ。寺ハ、衆ヲ集テ掃絶ヲ示ス舞臺也。

(72) 一、善居士、聞ニ日峰講碧岩一、香典一貫持テ上洛、往聴之。干時南泉猫児話也。講罷云、我ハ界之善居士ト云者也。猫児話ノアソハシヤウカ悪、此テハ、国師ハ此句ヲコソ御着アレ、彼テハ此句ヲコソ御着アレ、ト云。日峰云、今時ハ、俗人ハ何ヲモ不知<sup>ソ</sup>、善知識ヲ颯<sup>ラ</sup>カヤウノ事ヲ云ト云テ、腹立セ

ラル。居士云、我ハ紫野諸善知識ニ參禪シタ者チャ  
ホトニ、知イテ善知識ヲナフルテハ有ルマイ。サリ  
トテハ、先師ノ心得トハチガウタ、ト云々。又阮南  
江講碧岩時云、鵬月火燒山与三人證龜成鼈、類則ト  
云。居士云、類古則ト仰ラレサウハ悪イ。チト參シ  
分ル子細アリ。南江云、サアラウニハ、圓悟ノ悪ウ  
見タマテヨ。其後南江謂居士云、類則ト誤テ云々、  
許之、云々。居士謂人云、南江ト云天下文字僧ヲツ  
メタ、ト云。又南江云、山谷ハ、晦堂下テ能悟徹シ  
タ、東坡ハ雖悟終ニ不悟也。善居士云、溪声便是廣  
長舌、山色豈非清淨身、夜來八萬四千偈、他日如何  
拳示人。先師ノ仰ラレタ、大人境界ヲ具スル人テ無  
テハ、此頌ヲハ得作マイト仰ラレタ、ト云。南江、  
返事モセイテ居ラレタ。名人ヲ兩度マテツメタト我  
ト云々、

(111) 一、月庵暫時京洛時、寄宿一条、花叟會下有繫首  
座、道号ハ茂林、天潤庵僧也、月庵ハ問答ノ上手ト  
聞及タホトニ、行テ欲相看。出待者問、什麼処來。  
繫云、紫野僧ト。聞ニ其声ハ、裡カラニケラレタ、別  
傳ニコリラレタ程ニ、カウセラレタゲナ。繫首座、  
初參花叟、後參養叟、々々之後、居堺小林寺、一期  
終、不道仏法。傍人云、花叟會下ノ僧ト云ヘトモ、

『大徳寺夜話』をめぐって (三) (飯塚)

仏法ヲ知ヌケナ、仏法ノ沙汰ヲセスト云。死後小箱  
をアケテ見タレハ、有養叟印可狀。善居士云、餘独  
角ナ僧也、印可ヲ出時、相カマヘテ人ニ知セナト、  
一言仰ラレタホトニ、如此ナリ、

(112) 一、繫首座臨終時、善居士請辭世頌云、繫云、平  
生受用ニ書スル事カアリテコソ。死後、居士聞有印  
可狀云、サレハコソ只ノロカラハ出マイ、ト思タ。  
大宗云、我ハ繫首座ノ恩ヲ受タ。古則ヲハ參セネト  
モ、參禪ノ様子、始中終ヲ教ラレタ。先何タル古則  
ヲ見テ好キナント云底ノ事也、

(307) 一、了翁普知客ハ、華叟和尚小師也。△蓋言外小  
師歟。師遷化後、居關東、善居士號商人、每赴  
關東、雖遍參洞下知識、而心未穩。偶面了翁以說此  
事。了翁指詣華叟於江州。善居士行水喫齋(譯)而參詣住  
吉明神、居士語之。大照禪師云、善居士之見地ハ、  
不審ニサウト。師云、善居士、平生如レ古則身ヲモ  
ツ者チャ程ニ、サアラウソト仰ラレタ也、

(359) 一、猫兒話。世間相ヲハ、何ト用タソ、一字入公  
門、九牛拽不出、如何是公門ト搽也、養叟云、善居  
士ハ、是ヲ能參得シタリ、

(383) 一、慶雲善居士辭世、鑊湯無冷処、七十有二年、  
一機瞥轉去、虚駕鉄船。

次ぎに惠深居士についての記述を見てみたい。

- (18) 一、黒河大明寺、大用<sup>(有力)</sup>之代、回祿、仏殿有燒櫛。大用<sup>(有力)</sup>向衆云、不着手而拔<sup>(有力)</sup>此櫛<sup>(有力)</sup>。来。或有一喝者、或有拂袖去者、或有道一踏々倒者。有久参之一尼、拔<sup>(有力)</sup>櫛掉<sup>(有力)</sup>腰、直向山門出去。大用<sup>(有力)</sup>肯。深居士<sup>(有力)</sup>拳<sup>(有力)</sup>之、大照云、鑊湯無冷処。大照代云、截断紅塵水一溪、但鑊湯無冷処好シ。師曰、代語ハ、一棒一掌ノ上ヲ云。居士下語ハ、一棒一掌ノ落居也。師曰、大衆各落大有ノ圈續、一尼獨猶不落圈續也。大宗禪師語之深居士云、如何下語。居士云、活卓<sup>(有力)</sup>。大宗深肯之。大有境界ヲ活タ、ト云也。深居士、此下語ヲ大宗肯ト語<sup>(有力)</sup>大弘。ハ、謂衆云、我若當時、展坐具、櫛ヲ三度礼拝スヘシ、此礼拝<sup>(有力)</sup>殊勝ナル夏ヲ聴聞申ソソウ、ト云心モアリ、又推緩タル心モアリ。師曰、如何<sup>(有力)</sup>。一僧<sup>(有力)</sup>揶云、礼拝意旨如何。師曰、打草驚蛇。櫛ヲ礼拝シタハ、大有ヲ礼拝シタルナリ。
- (25) 一、深居士、与一兩輩之俗漢、看醜翻花、飯次、参詣清水、一兩輩俗漢燒香礼拝。居士亦然。俗漢云、居士ハ、紫野参禅、如何同某甲等之迷人。居士笑云、我境界可知。養叟和尚聞云、居士恁麼可用了也。此次、小野小町歌物語アリ。恁麼ノ用ヲ知テ、

作恁麼ノ振舞也。

- (61) 一、曹洞ノ知識、過深居士私宅之次、問云、養叟和尚、近日在什麼言句。居士云、有什麼言句。道了、一踏々倒。
- (244) 一、深居士云、現成ヲ能用タル好也、物ヲコ子マハサテ、白物ヲハ其上、黒キ物ヲハ其上、不<sup>(有力)</sup>働<sup>(有力)</sup>其俱用ル也、松源ハ、現成ヲヨク用タ僧ト、大用美之。
- (310) 一、師曰、深居士問大照禪師、衆生界ハ、尽スル者カ、尽キマシキ者カ。大照云、衆生界ハ、ナニカ尽ソ。衆生界ハ、幾回モ輪回スル者チャ程ニ、ナニカ尽ソ。居士語之師也。師曰、劫火洞然、大千俱壞ト云タレ共、ソレモ真箇イツ壞スヘキ事ヤラウ、不得知事也、大千俱壞タリトモ、又始マルヘシ。草木モ拔テノクレトモ、雨露ノ湿ニ、又生ルモノ也。天地モイツ破ント云理ハアルマイ。余云、森羅萬象ハ、悉人々ノ上ニテ滅ソノクル物テソウ。其故ハ、心外無法、滿目青山ト云ニテモ聞ハサウ、師曰、輪回則、サハアルマイソ。余云、是ハ不輪回者ノ上ノ事テサウ。師肯之。師曰、是法住法位、世間相常住ト云ニテモ、衆生界ノ尽マシキ処ハ、見ヘタルソ。壞シタ計ナラハ、何カ常住相トハ云ハウソ。

壞、又如來生スル処ヲ常住相ト云タル也。私云、是法住法位、世間相常住以下、恐師不図彼歎。

(381) 一、岐雲ハ、界之人、池永寿岳ノ伯父也。小久參也、深居士、大宗禪師兩三人相對ノ常道。

(382) 深居士貧而下界時、養叟和尚命庵中子衆、助料足出三貫充、有三四十貫文。

惠深居士は、一休に對して批判的である。

(336) 一、深居士云、一休ハ随分ノ僧ト思タレハ、ヲカシイ処カアル、諸惡莫作、衆善奉行ト云事ヲマタ知

ヌゲナ、(『夜話』)

『大徳寺夜話』に見える一休の記事は、一休側の資料ほか關係資料によつてある程度裏付けられる。

(117) 一、一休透西洞院時、有問、市中還有隱麼。云、有。僧云、如何是市中隱。云、何似生。此與ナル答話也。是ニ合テハ、有ト答タハ、セメテチャト、先師ノ仰ラレタ。有僧問一休、生死到来時、如何回避。云、上無攀仰、下絶己躬。大照禪師聞之、仰ラレタ。一休ニハ似相タ答話ソ。是程ノ事ヲモ不知。小魚吞大魚。一休下語、ヤマガラ胡桃ヲマワス。又、後園驢喫草。云、雲深猿盜栗。是等ノシヤレ事上手也。大宗禪師、聖諦第一義、下語云、頬ニ似テヘソマク。一休垂示下語ニ、吹面不寒楊柳風ト云句ヲ着ラレタ、弘宗禪師云、師家ニ向テ

『大徳寺夜話』をめぐつて(三)(飯塚)

可使句サへ知ヌトテ、座敷ヲ遂立ラレタ。天潤庵ノ密傳ハ、無文字僧也。住界禪通寺時、山門仏事ノ韻ニ、三踏通之字。一休和尚之云、北有禪通、南有大通、新長老響、一文不通。

この(117)の記事は、『一休和尚年譜』の宝徳元年条の記事に合致する。

宝徳元年己巳、師五十六歳、街頭逢僧、問師曰、市中有隱否。師曰、有。僧曰、如何是市中隱。師曰、何似生。

一日、僧無語。師打僧曰、龍頭蛇尾漢。

大徳寺派においては「大燈国師以来」、「何似生」の語は、「大燈国師三轉語」の話の中で、或いは独立した公案として参ぜられてきたものであり、『狂雲集』の中でもとりあげられているが、養叟側からすれば、この一休の答話はいい加減なものであると批判している。又、大徳寺派系密参録『百則』(駒澤大学図書館蔵)所収「古帆未掛」の話頭の請益に、

○小魚吞大魚。

一休ノシヤレ下吾ニ云、男子生女子。又、山伽羅胡桃ヲ舞ワス。

弁、胡桃ノ、クルクノ舞処ヲ、輪廻顛倒、又ハ、逆ノ方ニ用タ。

○後園驢喫草。

一休ノ下吾云、猿盜栗。

弁、是色相ノ順也。

とあり、一休の答話としては有名なものであったと思われる、  
△雑古則密參録▽や『一休咄』にも引用されている。

(187) 一、一休問レ僧、紫野僧養叟ヲ始テ出世スルハ、  
移他家也。僧云、一休コソ移他家ヨ。時宗衣ヲ着、又拾  
得ヲ着、可レ有様ニ出世ヲメサレサウヌ程ニ、出世スル  
カ移他家ナラハ、天下ノ僧ハ、皆移他家テアラウカ。一  
休ツマラレタ也。〔夜話〕

一休の『自戒集』では、養叟や春浦宗熙の禅は、唱門士の  
宗であると批判し、「異高(イタカ)」として批判している。

以下の記事等に対する反論と言つてよいと思われる。

(14) 紫野ノ佛法ハジマツテヨリコノカタ、養叟ホトノ  
異高ノヌスピトハ、イマダキカズ。比丘尼ニ法門ヲオン  
ユル事モ、比丘尼ノ得法ダテモ、養叟ヨリサキハ、ソウ  
ジテナシ。建仁寺ニテハ、養叟・紹熙、犬ヤラウ人ヤラ  
ウモ、人コレヲシラズ。(※『自戒集』の整理番号は、筆者  
による。)

(55) 竹篋大鼓共一船、養叟禅耶唱門禅。異高新成五種  
行、勸進近終百貫錢。

(竹篋と大鼓と、共に一船、養叟の禅か唱門の禅  
か。異高、新たに成す、五種の行、勸進近ごろ終り  
て、百貫の錢。)

(373) 一、一休住土菴時、多賀豊後司職以与大宗有問、  
是非ニ打殺テノケウスルト云程ニ、六借布思テ居住吉。

〔大徳寺夜話〕

養叟示寂後、一休の批判は春浦へと集中し、それは『狂雲  
集』『自戒集』において確認できる。この点については、前  
稿において触れたので、ここでは『一休和尚年譜』の記事を  
あげるにとどめる。

長祿元年丁丑、師六十四歳、夏末入薪、居十余日、細川  
源京兆介龍安(承)乘義天、略致外護之意、且開幕下館、迎待  
甚渥、蓋此時途中逢熙蔵主、痛罵法中姦族、其徒欲加害  
於師、流言紛々、

これによれば、春浦と一休との対立が既に沸点に達してい  
たと思われる、春浦と多賀氏(高忠カ)の間の答話で、一休を  
殺そうと口にするまでになっていた。この語が出てくる背景  
には、養叟、特に春浦宗熙と多賀氏との関係が緊密であった  
ことがあげられ、その語録所載の仏事・拈香法語や道号など  
からも確認できる。

1、円通院殿小斂忌拈香△『養叟録』小仏事(8)▽

円通院殿香林英公禅定門(多賀豊後入道親父也)

「功德主」孝子宗円、文安四年七月廿二日(一四  
四七)

2、多賀豊後肖像△『養叟録』真蹟(3)▽

金吾都管大源宗本居士、享徳改元壬申九月日（一

四五二）

3、春林宗芳大禪定尼小斂忌△『春浦録』拈（50）▽

「功德主」経家（多賀左右衛門尉カ）、文明十五年  
林鐘初九日（一四八三）

4、春林宗芳禪定尼大祥忌△同拈香（56）▽

「功德主」経家、文明十七年夏五初四日（一四八  
五）、就于当院（養徳院）

5、怡雲妙喜大姉三十三年忌△同（52）▽

「功德主」孝子豊州太守高忠（多賀）、文明癸卯△  
十五▽（一四八三）

6、大源本公禪定門小斂忌△同（62）▽

前豊州太守大源本公禪定門（多賀高忠）、  
「功德主」経家、文明十八年仲秋十七日（一四六

八）

7、春林宗芳大禪定尼△同、下火（198）▽

8、「多賀豊州并新左衛門殿、所寄附之二十石之米、若  
有相統之志者、如此間立大源（高忠）之位牌、毎日

可吊也。縦又雖相年忌ニハ備靈供有諷経也。（中略）  
寺領 并当院之義、可被憑多賀新左衛門殿者也」

明応三年三月日宗熙（一四九四）△養徳寺法度▽

9、桂林 宗芳居士 多賀新兵衛殿△『春浦録』道号

『大徳寺夜話』をめぐって（三）（飯塚）

（309）▽

（※『養叟録』『春浦録』の整理番号は筆者による。）

又、一休の『自戒集』にも、多賀氏の記事が見える。

（13）智過君子賊心工、無端入得大獄中。乞命多賀出雲  
殿、強問水急吞吐洪。

（智は君子に過ぎたり、賊心の工、端無くも入り得たり、大  
獄の中。多賀出雲殿に命を乞えども、強問は、水急にして、

吞吐洪いなり。）

「多賀出雲殿」は、京極持清の臣、幕府侍所所司代を勤めた  
人物と思われる。「強問」については、『碧山日録』寛正二年  
三月二十八日条によれば、所司代多賀出雲守は、南禅寺の二  
僧に数升の水を吞ませて拷問している。

（32）賊智如上饜棚狗、手脚脚兮脚即手。隠之弥證大隠  
菴、多賀出雲須召取。

（賊の智は上の如し、饜棚の狗、手は即ち足、足は即ち  
手。之を隠せば弥いよ證る、大隠菴、多賀出雲、須らく

召取るべし。）

『龍嶽和尚葛藤』や『寶山紀談』に見える一休の関連記事を  
あげれば以下の通りである。

（180）蜷川不白歌云、廣沢ノ池ノ心ハ不<sub>レ</sub>知、ミル人モ  
ナキ秋<sub>レ</sub>夜<sub>レ</sub>月。師代、万里一條鉄。又云、此歌ノ心ハ知

ラジソソラクハ釋迦達磨モ定家家流モ。

(181) 一休云、此歌ノ心ハ知ラデオソラクモ釋迦ト達磨ト道家々流。

(182) 太田道觀問一休云、御僧ハ、破<sub>レ</sub>夏<sub>何ノ</sub>処<sub>ニ</sub>カ行ク。

休答云、廊下ニドシメクハ、何事ゾ。觀問云、寺ノ名

。休答云、法界寺。觀云、本尊。休云、虚空藏。觀

云、御僧ノ名ハ。休云、自由自在。觀云、扇子<sub>出シテ</sub>御座

アレ。休云、ヲレガマ、チャイヤ。觀云、御僧ノ寺ハ。休

云、紫野。觀云、仏法ハ。休云、桔梗カルカヤヲミナヘ

シ。

(201) 新年頭仏法、生耶死耶。休、生也不道、死也不

道。答、離生死一句。休云、住虚空。<sub>(ママ)</sub>答、空無壁、坐住

什<sub>ハ</sub>処。休云、空而住空。

如何是殺生戒。斬ツハツ、骨ト皮トニハナサヌカ。

如何是偷盜戒。ソラ吹ク風<sub>ヲ</sub>バ、ヌスマヌカ。

如何是邪姪戒。カナメト<sub>ノ</sub>チギラヌカ。

如何是妄語戒。虚言ハナイカ。

如何是飲酒戒。ヒトサシ舞テ、酒ハノマヌカ。

(202) 如何是紫野仏法。一休云、桔梗カルカヤオミナメ

シ。色々ヲハ、何ト染タルゾ。休云、夕ノ嵐今朝ノ露。

離色一句。休云、問着春風総不知。(※以上『龍嶽和尚葛藤』整理番号は筆者による)

(15) △泉南優婆塞祖溪宗臨菴主、一休、檀度也。一日

詣<sub>シテ</sub>開山國師ノ塔ニ、發<sub>ニテ</sub>心誓<sub>フ</sub>云、予家、近日營<sub>ニ</sub>商舶<sub>ニ</sub>

到<sub>ニ</sub>宋域<sub>ニ</sub>、風帆順調<sub>シテ</sub>、運載得<sub>レ</sub>トス利<sub>ヲ</sub>。是レ凡心ノ非<sub>レ</sub>所<sub>ニ</sub>

思議<sub>スル</sub>。庶幾ハ借<sub>ニ</sub>靈驗<sub>ヲ</sub>、成就<sub>セン</sub>子カ所願<sub>ヲ</sub>。聿ト<sub>シテ</sub>吉

日<sub>ヲ</sub>、泛<sub>ニ</sub>一葉<sub>ヲ</sub>於大洋<sub>ニ</sub>。不<sub>レ</sub>日、其舶到<sub>ニ</sub>宋域<sub>ニ</sub>、得<sub>レ</sub>利過

當。菴主欣躍<sub>シテ</sub>告<sub>レ</sub>衆、再<sub>ニ</sub>造大徳<sub>方丈</sub>。當<sub>ニ</sub>造營<sub>日</sub>、

以<sub>ニ</sub>航<sub>レ</sub>海橋<sub>、為<sub>ニ</sub>厨庫<sub>棟宇</sub>ニ</sub>矣。檀信甚深、靈驗至厚、

豈可<sub>ニ</sub>苟簡<sub>一乎</sub>。

(65) △或人臨<sub>ニ</sub>末後<sub>ニ</sub>、問<sub>ニ</sub>一休<sub>云</sub>、只今如何。休云、

只今穢土去。有人來問<sub>ニ</sub>春浦和尚<sub>云</sub>。浦曰、青山緑水。

(95) △一休派<sub>ニ</sub>ハ、參<sub>ニ</sub>夢<sub>ノ</sub>一字<sub>ニ</sub>、極睡<sub>ニ</sub>無<sub>レ</sub>夢<sub>ノ</sub>、本分

之方<sub>ニ</sub>用<sub>ユル</sub>也<sub>リ</sub>。悪<sub>キ</sub>用<sub>ヒ</sub>也。

(97) △春浦和尚垂示曰、室中有<sub>レ</sub>物、諸人還見塵。代

曰、待<sub>ニ</sub>汝<sub>ヲ</sub>踢<sub>ニ</sub>翻乾坤<sub>ヲ</sub>向<sub>レ</sub>汝道。師曰、知<sub>ニ</sub>這般事<sub>、便</sub>休。

此時正翁下語云、住持事繁。春浦大嘆曰、如<sub>レ</sub>此句<sub>ハ</sub>、

合<sub>ニ</sub>自<sub>コソ</sub>師家道<sub>ヲ</sub>。翁云、某甲<sub>カ</sub>罪過<sub>ト</sub>云<sub>テ</sub>、礼<sub>ニ</sub>三拜<sub>ス</sub>。此<sub>ノ</sub>

序<sub>ニ</sub>浦<sub>ノ</sub>語話<sub>ニ</sub>云、昔日一休垂示<sub>ノ</sub>下語<sub>ニ</sub>云、湿<sub>レ</sub>衣欲<sub>レ</sub>湿<sub>レ</sub>杏

花雨、吹<sub>レ</sub>面不<sub>レ</sub>寒楊柳<sub>ノ</sub>風。華叟大咲<sub>テ</sub>曰、道<sub>ニ</sub>師家使<sub>テ</sub>

句<sub>ヲ</sub>也。

(109) △有<sub>レ</sub>人告<sub>ニ</sub>一休<sub>云</sub>、願<sub>ハ</sub>預<sub>シメ</sub>聽<sub>シ</sub>辭世<sub>ノ</sub>偈<sub>ヲ</sub>。休即

應<sub>レ</sub>声而告曰、借用申<sub>ス</sub>地水火風、返辨申<sub>ス</sub>今月今日。

△今真珠菴<sub>ニ</sub>現在<sub>ノ</sub>辭世<sub>ノ</sub>偈<sub>、須弥南畔</sub>、云々。(以上『寶山紀談』、整理番号は筆者による)



## 養叟派下と関山派との葛藤

宗峰妙超（大燈国師）によって、大徳寺の寺院運営や教団形成の方向性はある程度まで示されたが、実際の運営と教団の形成に大きな役割を果たしたのは、第一世徹翁義亨であり、以後の発展の基盤を築いたと言える。中でも徹翁による大徳寺徒弟院化の運動は、後世に大きな影響を及ぼす事になる。大徳寺は、後醍醐天皇、花園天皇の両朝から宗峰妙超会下による一流相承の寺として、又勅願所として認める宸翰を下賜され、徹翁による大徳寺の徒弟院化は完全に作されることになる。これによって事実上、大徳寺住持となる資格は徹翁派一流によって独占される。貞治六年（一三六七）に至って、徹翁の門弟による住持職継承が公認されている。大徳寺の徹翁派一流相承利化について注目すべき点は、徹翁の著した「大徳寺法度」に関山慧玄排斥を示唆する一条が含まれていることである。その一条とは、

### 一、宗得首座、慧玄蔵主事

先師深御勘氣之上者、更不可許門流之号。特慧玄蔵主事、大有子細、先師有遺言、各宜存知也。遺言記置一紙也。

宗得首座と慧玄蔵主とは、先師大燈国師の勘氣に触れ、門流の号を許されず、特に慧玄蔵主については子細があり、そ

の遺言が一紙に書き留められているという。ここに言う、宗得首座については不明であるが、慧玄蔵主は後に見る養叟と一休の主張とも相応することから、妙心寺開山関山慧玄（一二七七〜一三六〇）であると考えられる。『大徳寺夜話』にも以下のように見える。

（12）一、徹翁和尚、法度中曰、宗得首座、恵玄蔵主、先師御勘忌之上者、不可許門流之號。殊恵玄蔵主事者、別而有子細、各可知。△宗得首座ハ、賀州長福寺開山乎。恵徹首座擯出、洞下改名▽

さて、至徳三年（一三八六）七月十日における五山位次改定によって、大徳寺は十刹の第九位に列されている。足利義持は、五山管理に規定厳守の方針で臨んだから、大徳寺に対しても十方住持制の勵行を強いたと思われる。その結果、大徳寺住持資格は、大燈派下徹翁派一流から、大燈の師である大応国師（南浦紹明）を祖とする大応派下全体へと拡大する。「龍寶山住持位次」によると、第十八世東源宗漸（建仁寺天潤庵）、第二十一世香林宗簡（嗣月菴宗光）、第二十三世巨嶽（天潤庵）、第二十五世樗庵性才（南禅寺正眼院）等があげられる。しかしながら、この官利化は、寺勢を興隆させる方向には進展しなかった。その兆候は、言外宗忠の頃より見られると言う。しかし、大徳寺派内にも五山に留まり、足利氏との関係緊密化を志向した者としては、言外門下の大模宗範（大徳寺

十七世)がいる。養叟宗頤が大徳寺に出世する以前には、むしろこちらの方が主流派であったと思われる。大模は足利義持の帰依を受け、その弟子である春作禅興も、義持自ら画いた達磨像に著賛しているなど、その親交があったことが知られている。しかし、養叟の大徳寺出世前後から、大模派は次第に傍流へと転ずることになる。これに対して養叟宗頤は、大徳寺を紫衣勅許の道場として、官利から離れ徹翁以来の一流相承利(徒弟院)の禅寺とする運動を行っている。永享三年(一四三二)九月十日に、大徳寺は至徳三年以来四十五年に及ぶ官利から外れて、綸旨による紫衣勅許の寺となる(『大徳寺文書』第一二五〜一二七号)。

さてここで、当時における妙心寺派の展開について見てみたい。応永六年(一三九九)、大内義弘は鎌倉公方足利満兼などと結んで反乱を起こした。大内義弘と親交のあった妙心寺住持拙堂宗朴はこの事件に連座したと見なされ、乱平定後、足利義満は妙心寺を没収し、青蓮院管轄とした。後に、妙心寺は、南禅寺徳雲院にあった延用宗器(一四三二)の管理に移される。延用は、妙心寺を「龍雲寺」と改称し、これを徳雲院末としている。かくして妙心寺派の人々はこの時期依るべき拠点を失ったことになり、これが本来法系的に近い関係にある大徳寺派及び大徳寺への接近につながる。この時期の京都における関山派の拠点は、五山派として展開していた

大応派の中に求められるが、具体的には南禅寺正眼院(南浦紹明の法嗣である通翁鏡圓の塔頭)、建仁寺天潤庵(南浦の法嗣可翁宗然の塔頭)等がそれである。妙心寺の廃絶期を経て、復興の兆しが見えるのは、開山塔(微笑塔)敷地を延用から根外宗利に与えられる頃からである。その再建の事業は、日峰宗舜・義天玄祥(承)・雪江宗深によって行われた。

ここで日峰宗舜について若干説明を加えたい。日峰宗舜(一三六八〜一四四八)は、無印宗印の法嗣で、尾張犬山に瑞泉寺を開創し、当地に関山の宗風を挙揚した。妙心寺住持となると、開山塔の微笑塔を整備し、養源院を傍らに建立した。日峰において注目すべきことは、管領家細川氏との関係である。細川持之が日峰に帰依したのを端緒として、その子細川勝元は妙心寺の外護者となったが、外護者としての立場は更にその子政元へと継承されていった。かくして日峰は細川氏の力を背景に、瑞世道場としての大徳寺へ出世することになる。なぜなら、妙心寺が紫衣勅許の道場となるのは、永正六年(一五〇九)まで待たねばならないからである。

当然大徳寺派内では、関山派の晋住に関しては強烈な反発を引き起こすことになる。そして、この関山派排斥の大徳寺側の代表は徹翁派下の直系(徹翁―言外宗忠―華叟宗曇―養叟)を自認する養叟宗頤である。先に見た文安四年の事件以前に、この問題は既に顕在化していた。『一休年譜』の文安元

年（一四四四）条に、次のように見える。

関山一派昔擯斥以来、未嘗往還山中、况亦可鉞斧敢入其手哉。舜日峰以官命将住山。養叟和尚和会師、而欲拒其入寺。師仮作門看、叟仮作日峰、問答數番、約彼負墮則不許入門。師先横棒跨門限、叟学峰来之儀。仮看搗曰、自門入者不是家珍。仮峰衝口曰、如何是家珍。看乃曳棒曰、吞舟之魚不遊竜門。峰弘袖而去。看曰、好去、西天路超超<sup>辺カ</sup>十万里。師謂養叟曰、義勇既如此、官命実不可拒也。叟憮然。

これによれば、関山一派は昔擯斥されて以降は大徳寺に入りすることはなかつたのであるが、今や日峰は官命を以て住山しようとしている状況にあつた。養叟和尚は一休との和会を求め、一休と共に日峰の入寺を拒もうとする。結局この企ては、一休自らが破棄したと言う。日峰宗舜の語録には、文安四年晋住の記事が見える。

「禅源大济禅师日峰和尚京城龍宝山大徳禅师法語、於文安四年（一四四七）八月二十二日入寺」

養叟の日峰の大徳寺晋住に対する憤りは、実伝宗真撰述の『宗慧大照禅師行状』（孤蓬菴所藏『大弘禅師語録』所収）の中にも見て取れる。

玄関山之徒宗舜、假威於細川源公、脅師欲住本寺。師堅拒之曰、靈山翁稟国師命、而排擯関山。而後其徒不印足

『大徳寺夜話』をめぐって（三）（飯塚）

跡於此山者累三世。今也舜等、恣檀越之權、欲玷辱先師。我門不幸、正在此時。蓋忤当權者溢也。凌蔑先師者、不也。隘與不恭恭我攸不取也。不如匿跡、且俟時矣。

ここにおいても、徹翁が宗峰の命を受けて関山を擯斥して以降、関山派は大徳寺内に入りしていないと言っている。日峰の大徳寺入院拒否の論拠は、『一休年譜』のそれと同じであり、それは前述した大徳寺法度の一条に見られた関山擯出の記事が相応するものと思われる。

日峰宗舜の大徳寺晋住を強力に推進した細川勝元の姿勢に強い不快感を感じた養叟は紀伊の国贄川に隠棲する。

深栖止紀之山中、贄川公剋徳禅院而居焉。其基趾盤礴于葛城山半腹、而態千状万風景可愛。紀見坂之高下、也峭壁攢峰鍾秀、以為寺後主山、吉野川之隱頭、也曲渚回塘縷引、以為門前湖水。師嗜其勝槩、有終焉之志、自命於石工、雕刻其像、至今猶存矣。細川公累遣使招師。々確乎不出。公託播州山名金吾公、欲奪本寺資糧之地小宅庄。師云、重先師義、不與時俯仰、亦近于隘矣。弗獲已而皈本寺。（『大照禅師行状』）

『自戒集』にも、関連の記事が見られる。

（112）家業朝暮雖括狗、虎菊風流水手。生落早有食牛機、作家大用大猪取。

『大徳寺夜話』をめぐる(三) (飯塚)

(家業は、朝暮に狗を括ると雖も、虎菊は、風流山水の手。生れ落つれば早や食牛の機有り、作家の大作、大猪取り。)

虎ニ食牛語、自然妙也。紀ノ州ノニエカワト云フ處ニ、養叟山居アリ。時ニイノシム来ル。僧トモヨリ合テ、手サイクニ打コロス。又手サイクニ皮ヲハイテ、手テウサイニシテ、サイククライニクラウ。ミチノモノモイマケスト也。サレトモ、持齋ノ事ナレハ、腹ラクタシ、ニハカニツラナントハレケリ。アル僧、コノ猪ニノル。ソレヨリシテ、此僧ヲハニタノ四郎トノナツケケリ。此事、門中ニカクレナシ。

大徳寺三十六世となる日峰宗舜以後、関山派の大徳寺晋住は、七十五世雪岫瑞秀まで断続的に行われた。『龍寶山大徳寺誌』によって、養叟以降の歴任を表にまとめると以下の通りであり、併せて関係系図示す。

大徳寺住持籍(龍寶山大徳寺志による)

世代	住持名	嗣法関係	備考
二十六世	養叟宗願	嗣華叟	文安二年八月二十八日奉 <sup>レ</sup> 黃勅 <sup>ヲ</sup> 再住、改十利 <sup>ニ</sup> 、復三元亨 <sup>ニ</sup> 、旧規 <sup>ニ</sup> 。
二十七世	明遠宗智	嗣言外	為 <sup>二</sup> 言外 <sup>一</sup> 侍者、永享十一年月日化 <sup>ス</sup> 。
二十八世	無言	嗣日山	山嗣大燈。
二十九世	璉江	不詳	

三十世	日照宗光	嗣言外	
三十一世	滅崖宗興	嗣無碍	
三十二世	格堂祖遠	嗣大模	
三十三世	季東宗溟	嗣養叟	歴任
三十四世	燈庵玄金	嗣春作	
三十五世	一洲宗藝		文安三年四月十一日出世。
三十六世	日峰宗舜	嗣無因	関山和尚 <sup>ノ</sup> 四世、案 <sup>スル</sup> 一休 <sup>ノ</sup> 年譜 <sup>一</sup> 、後花園院、文安元年甲子入寺、齡八十、奉 <sup>レ</sup> 勅 <sup>ニ</sup> 住大徳 <sup>一</sup> 、文安元年正月二十六日寂、八十四歳。
	右関山派入寺始		
三十七世	定庵宗監	嗣乾用	用 <sup>レ</sup> 嗣 <sup>レ</sup> 徳翁 <sup>一</sup> 、庵名 <sup>ニ</sup> 長勝 <sup>一</sup> 。
三十八世	惟三宗叔	嗣養叟	享徳癸酉出世、七月十二日化。
三十九世	義天文承	嗣日峰	寛正三年三月十八日化 <sup>ス</sup> 、七十歳、関山派始 <sup>ニ</sup> 賜 <sup>レ</sup> 紫衣 <sup>ヲ</sup> 、繪旨 <sup>ニ</sup> 、
四十世	春浦宗照	嗣養叟	寛正二年十一月十四日出世、明応五年正月十四日化、八十八歳、塔正源院
四十一世	雪江宗深	嗣義天	文明十八年六月二日化、七十九、関山派
四十二世	体調	嗣養叟	
四十三世	顕室	嗣養叟	
四十四世	柔仲宗隆	嗣養叟	案 <sup>スル</sup> 一休 <sup>ノ</sup> 年譜 <sup>一</sup> 、文明六年二月二十二日、広徳寺柔仲和上、捧 <sup>レ</sup> 勅 <sup>ヲ</sup> 黄来 <sup>ニ</sup> 、致 <sup>シ</sup> 大徳寺住持 <sup>ノ</sup> 請 <sup>ヲ</sup> 、
四十五世	岐庵宗揚	嗣養叟	応仁乱中、移 <sup>シ</sup> 寺 <sup>ヲ</sup> 於城北 <sup>ニ</sup> 、開堂 <sup>ヲ</sup> 始 <sup>メ</sup> 、塔云 <sup>ニ</sup> 大清軒 <sup>一</sup> 、正月十日化、

四十六世	景川紹隆	嗣雪江	関山派
四十七世	一休宗純	嗣華叟	文明六年二月二十二日、受勅黄、于時八十一歳、文明十三年十一月二十一日化、八十八歳、塔名「慈揚」、塔「真珠庵」。
四十八世	晦翁宗昭	嗣養叟	世寿九十七、塔但州定教山祐徳寺。
四十九世	芳蔭		
五十世	泰叟宗愈	嗣春浦	文明十一年九月十日化、大徳方丈上棟、有文明十戊二月二十一日住持泰叟之札。
五十一世	特芳禅傑	嗣雪江	当时再興、始、関山派、大徳法堂上棟、文明十一年亥六月十八日、住持禅傑之札、入寺開堂、文明十一年春也。
五十二世	悟溪宗頓	嗣雪江	明応九年九月六日化、八十五歳、関山派、於「大徳」勅使再住之始也、
五十三世	東陽英朝	嗣雪江	文明年中出世、永正元年八月二十四日化、七十七歳。
五十四世	一溪宗統	嗣春浦	
五十五世	西浦宗蕭	嗣景川	関山派、西或作清。
五十六世	実伝宗真	嗣春浦	文明十八年十月四日出世、于時五十三歳、永正四年四月八日化、七十四、塔養徳院。
五十七世	天釈紹弥	嗣特芳	関山派。
五十八世	桃溪宗仙		
五十九世	椿叟宗寿	嗣惟三	永正元年八月十五日化。
六十世	天統宗受	嗣悟溪	関山派。

六十一世	天琢宗球	嗣春浦	文亀二年九月二十八日化、六十六歳。
六十二世	仁濟宗恕	嗣悟溪	関山派。
六十三世	悦堂 懌	嗣景川	関山派。
六十四世	桂庵 嫩	嗣海印	
六十五世	玉浦宗珉	嗣悟溪	関山派。
六十六世	独秀乾才	嗣悟溪	関山派。
六十七世	大機 竺	嗣海印	
六十八世	鄧林宗棟	嗣特芳	関山派。
六十九世	興宗宗韻	嗣悟溪	関山派。
七十世	陽峰宗韶	嗣春浦	永正九年七月二十六日化、八十三、塔竜泉。
七十一世	瑞翁宗縉	嗣悟溪	関山派。
七十二世	東溪宗牧	嗣実伝	永正二年三月出世、同四年四月十九日化、六十四、軒云「一枝」、塔竜源院。
七十三世	東海宗朝	嗣陽峰	永正十五年出世開堂、同年十一月二十日化、六十四。
七十四世	竺堂 桂	嗣桂庵	庵嗣海印、永正中出世、関山派。
七十五世	雪岫瑞秀	嗣玉浦	関山派、自是不出頭于大徳。
七十六世	古岳宗亘	嗣実伝	永正六年九月十七日出生、四十五、天文十七年六月二十四日化、八十四、塔大仙院、六角近江政頼之男、政頼旧号久頼、正光寺。
七十七世	廉翁忠謙	嗣椿叟	永正年中出世、大永五年七月二十四日化、六十四。

七十八世	一宗紹麟	嗣東溪	永正年中出世、永正年十一月廿七化、六十四。
七十九世	悅溪宗恣	嗣東溪	永正十二年二月二十九日出世、大永五年五月二十六日化、六十四。
八十世	古澗 宙	嗣燈庵	庵嗣春作、永正年中出世。
八十一世	玉英宗罔	嗣東溪	永正年中出世、天文三年六月十三日化。
八十二世	龍江宗翔	嗣陽峰	大永二年十月二日化、七十四。
八十三世	以天宗清	嗣東海	大永壬午四月二十一日出世開堂、天文二十三年正月十九日化。
八十四世	貞叔宗廉	嗣桂庵	大永壬午出世。
八十五世	千林宗柱	嗣東海	大永年中出世、天文十二年二月十五日化、六十八。
八十六世	小溪紹怱	嗣悅溪	大永五年二月出世、天文五年七月二十八日化、六十二、塔興臨院。
八十七世	休翁宗万	嗣悅溪	大永六年二月二十一日出世、天文三年十二月二十六日化、六十四。
八十八世	伝庵宗器	嗣古岳	大永八年四月十二日出世、天文二年三月十一日化、五十一。
八十九世	月浦玄珠	嗣古澗	

龍寶山大德禅寺志 宗派(養叟派下を中心と)

○大徳開山宗峰妙超

△播州人事、浦上掃部入道覺性男、嗣法南浦紹明、崇福五世、創祐徳寺于但州、建武四年、丁丑臘月廿三日遷化、五十六歳、塔云雲門庵、賜興禅大燈高照正燈大慈雲匡真国師▽

○大徳第一徹翁義亭

△雲州人、創徳禅于本山、安養寺于但州、応安二年己酉五月十五日化、七十五、諡大祖正眼禅師、後奈良寛永十五年十一月二十五日、賜天応大現国師、燈云正伝▽

○大徳七世言外宗忠

△与州人、創広徳寺于摂州、明徳元年十月九日示寂、七十六、諡密伝正印禅師、塔如意庵▽

○贈大徳華叟宗曇

△弘祥瑞寺于江州、住禅興・高源等、正長元年六月廿七日示寂、諡大機興宗禅師、塔大用庵、号卜竿子▽

○大徳二十六世養叟宗頤

△京師人、創大用庵于本山、陽春庵于泉南、長祿二年六月廿七日示寂、八十三、賜宗懋大照禅師▽

○大徳四十七世一休宗純

△後小松帝皇子、創真珠庵于本山、酬恩庵于薪山、床菜庵于摂州墨江、文明十三年辛丑十一月二十一日示寂、八十八、塔云何似、養母土御門相公室宗橘尼、宗順、夢闌、狂雲、晴驢、国景▽

○大徳三十三世季東宗溟

○大徳三十八世惟三宗叔

△七月十二日化▽

○大徳五十九世椿叟宗寿

△丹後人、永正元年八月十五日化▽

○大徳七十七世廉叟中謙

△但馬人、大永乙酉七月二十四日化、六十四▽

○大德四十世春浦宗熙

△自号巢庵、播州人、創松源・養徳二院、明応五年正月十四日化、八十八、正統大宗禪師、塔松源▽

○大德四十二世体調和尚

○大德四十三世顯室和尚

○大德四十四世柔仲宗隆

△兼任広徳▽

○大德四十五世岐庵宗揚

△創太清軒、始賜紫服▽

○一華任首座

○大德四十八世晦翁宗昭

△兼任祐徳、京師人▽

○妙案 西関 文

○猷叟宗芳

○大德五十世泰叟宗愈

△文明十一年閏九月十日化▽

○大德五十四世一溪宗統

○大德五十六世実伝宗真

△創清泉寺于伏見里、永正四年四月八日示寂、七十四、塔養徳院、賜仏宗大弘禪師、云挺虚▽

出竜源派※

出大仙派※

○大德六十一世天琢宗球

△尾州人、文亀二年九月二十八日化、六十六、▽

○大德七十世陽峰宗韻

出竜泉派※

○正翁宗匡

※竜泉派

○大德七十世陽峰宗韻

△京師人、塔竜泉、永正九年七月二十六日化、宝永五年諡匡眞靈慧禪師▽

○大德七十三世東海宗朝

△淡州人、永正十五年十一月二十日化、寿六十四▽

○大德八十二世竜江宗朔

△寿七十四▽

○大德八十五世以天宗清

△京師人、創早雲寺于相州、賜正宗大隆禪寺、自号機雪、天文二十三年正月十九日化、八十三▽

○大德八十五世千林宗桂

△寿六十八▽

○大德九十五世大室宗碩

△但馬人、早雲二世、創靈雲山本光寺、永禄山宝泉寺于相州、諡東光智燈禪師▽

○大德九十九世松翁宗佺

△号曠適子、相州糟谷人、早雲三世、創大聖寺、塔天用庵、寿六十一▽

○大德百十世南岑宗菊

△京師人、早雲四世、永禄十一年六月二十四日化、▽

『大德寺夜話』をめぐる(三)(飯塚)

※竜源派

○大徳七十二世東溪宗牧

△嗣実伝、筑前人、創大雲・中興二寺于江州、正法寺于勢州、永正十四年四月十九日化、六十四、賜仏慧大円塔一枝、号菓庵、三号、何似、閑々子、鉄中子▽

○大徳七十八世一宗紹麟

△寿六十四▽

○大徳七十九世越溪宗悉

△江州人、諡仏照大鏡禪師、主祭竜源、大永五年五月二十六日化、六十四▽

○大徳八十一世玉英宗岡

△京師人、天文三年六月十三日化▽

○大徳八十六世小溪紹忠

△濃州人、仏智大通禪師、塔輿臨院▽

○大徳八十七世休翁宗方

△豊後人、崇福七十五世、本州海門山円福十一世、創法泉・竜福二寺于防州、竜福院于本山、賜大殿仏燈禪師、天文三年十二月二十六日化、六十四▽

※大仙派

○大徳七十六世古岳宗亘

△近江人、六角近江守政頼子、天文十七年六月二十四日化、八十四、大永元年諡仏心正統禪師、天文五年賜正法大聖国師、号生菖、塔大仙、曾創小庵于泉南、扁云南宗庵▽

○大徳八十八世伝庵宗器

△京人、号頼驢、創口林庵、天文十七年六月二十四日化、(異、天文三年癸巳三月十一日、寂于南宗庵)

○大徳九十世大林宗套

△京人、旧諱寿桃、字惟春、入天竜寺天源院、受于肅元殿禪師、後遇古岳和尚、承印証、今改名字、創南宗寺于泉南、永禄十一年正月廿七日化、八十九、天文十九年仏印円証禪師、永禄二年正覚普通禪師、又号曹溪▽

○大徳百三世江隠宗顯

△越前人、創祥林軒、文禄四年二月六日化、五十六、諡円智淨照禪師、号破沙盆、寒蝶、主祭大仙・聚光二刹▽

関山派

○妙心開山関山慧玄

△信州人、延文五年庚子十二月十二日遷化八十四、塔微笑、諡本有円成仏心覚照国師、▽

○妙心二世授翁宗弼

△城州人、康暦二年三月二十八日、八十五、諡神光寂照禪師▽

○贈無印宗印

△尾州人、九歳建仁寺投天潤庵然可翁、薙髮、応永十七年六月四日化、八十五、諡興文円惠禪師、塔光沢▽

○大徳三十六世日峰宗舜

△九歳薙髮、曰昌昕、從臨川寺本源庵岳雲周登、文安五年正月二十六日化、八十、諡禪源大濟禪師▽

○大徳三十九世義天文承

△土州人、旧明承、改玄承、十五歳、依本州天忠寺義山和尚薙髮、寛正三年三月十八日化、七十、諡大慈慧光禪師▽

○大徳四十一世雪江宗深

△摂州人、文明十八年六月二日化、諡仏日真照禪師▽



○大徳四十六世景川宗隆

△伊賀人、明応九年三月一日化、七十六、諡本如実性禪師▽

○大徳六十三世悦堂宗輝

○大徳五十五世西浦宗肅

○大徳五十一世特芳禪傑

△尾州人、永正三年九月十日化、八十八、諡大寂常照禪師▽

○大徳五十七世天釈禪弥

○大徳六十八世鄧林宗棟

○大徳五十二世悟溪宗頓

△尾州人、明応九年三月六日化、賜大興心宗禪師▽

○大徳六十世天統宗受

○大徳六十二世仁濟宗恕

○大徳六十五世玉浦宗珉

○大徳六十六世独秀乾才

○大徳六十九世興宗宗格

△諡大猷慈濟禪師▽

○大徳七十一世瑞翁宗縉

○大徳七十五世雪岫瑞秀

○大徳五十三世東陽英朝

△濃州人、永正元年八月二十四日化、七十七、諡大道真源禪師▽

『大徳寺夜話』においては、当然のことながら関山派に対する自派の優位性を主張する記事が多く見られる。

(8) 一、開山曰、徹翁見地明白、白翁性地明白、関山雖悟徹、偏枯也、云々。

(86) 一、関山云、明日マテイキント思カ。言外云、アルコソ不思議ヨ。或云、言外向花叟云、明日マテ生ウト思カ。叟云、有ルカ不思議テソロ。諸人如何道。大宗代曰、アラ外也。大照云、罰ノ皮ニセウカ。大宗曰、嗚呼、閑事也。

(146) 一、師曰、関山ハ、色相境界ヲ、開山ニ問レテコソアラウ、ナレトモ、禪僧ト云者カ、色相ノ沙汰スル事ガアラウカト云テ、色相ノ境界ヲハ参セラレヌ。ソレ関山分上テコソ、サウモアラウスレ。後世ハサウ得心得マイ。関山派ハ、色相境界ヲ不知、サアルトテ、可笑事テハナイ。如関山悟タラハ、サウコソアルヘケレト、言外和尚ハ仰ラレタ。色相本分ヲ参分テ、落居、萬里ハ一条鉄ト用テコソ、猶ヨカラウスレ。初心ナ時カラ一枚ニ見セハ、ナマ心得ナ者ハ、ムサノトアルヘシ、

(181) 一、関山号頌云、踏断路頭難透処、寒雲長帶翠巒峯。韶陽一字藏機去、正眼看來隔萬重。後來裝ニ軸<sub>シテ</sub>此号、懸之人前、大照禪師云、児孫皆瞎漢也。

(215) 一、大照云、大徹大悟境界ハ、古則ノ上ニモ有、又、古則ノ外ニモアル也。上ニアルト云ヘハ、又古則ニ頭ヲツキ入テ居ソ。外ニアルト云ヘハ、一段別ニ有スルヤウニ心得也。師曰、知非後、古則ニ参スルハ、知事マテソ。句ハ繁多ナ程ニ、先師ハ、ドレヲカ下語ツラウ、不知ホト参也。関山派ニハ、無ニ非之沙汰。古則ライカ程ト数ヲ定テ参シサスルホトニ、与徹翁派之心得、天地懸殊也、

(この稿続)

【参考資料 (一) 『宗慧大照禪師行状』(孤蓬菴所藏) 『大弘禪師語録』所収】

師諱宗頤、字親叟、出于藤氏、其家世居於洛之東山靈山麓。年甫八歳、乳母抱師、詣東福正覺之室、拜九峯和尚為之師。迄祝髮受具、而司其侍局。後掛錫於建仁天潤菴、典藏鑰矣。攀鱗奮大周於土之吸江菴、附翼心空上人播之書寫山。所以深頤於内外之典也。再還建仁、書雲後版、其秉塵提唱、聳動人天矣。天潤有老宿巨岳者、參見龍寶範大模也。有日師私淑諸巨岳、有聞大模之道、頗以自負矣。或謂師曰、捨本而取末、尋流而失源者、道之弊也。方今大燈的裔・言外上足華叟和尚、韜光于江之安脇禪興精舍。你若不遠千里行、則豈非取本尋源乎。師佩服是言。即日躡足而詣其室曰、某得々而来、偏

為己事。和尚豈惜慈誨乎。叟不肯允容。師懇請者數矣。叟不忍峻拒曰、吾自先師亡、而於佛法二字忌口者、殆乎二十年。何圖今日始為你落草矣。師於叟之炉鞴裡、而百煉千煨、歷十有六霜、以作煨了底金。始知於臣岳処所得、是澄公藥求銀。遂承印證、為叟之的嗣。叟乃授師道称曰、養叟。其偈云、祖宗門下久參徹、充飽西來密旨禪。推得無端雪花鬢、逢人先語旧因緣。師寫叟之壽像需贊語曰、口吞佛祖、眼蓋乾坤。手裡竹篋、天魔喪魄。一句語提三要印、頤来的々付兒孫。叟乃付法衣一領云、吾道至你、大行于世。叟後自禪興庵、遷塩津高源院、師亦與俱。逮叟順世、結草菴於梅尾梅畑者二年、太單丁也。竟留錫大德、僑居金剛軒。師之門弟、戮力草創大用菴、為師之靈場。師奏於朝、為叟索本寺綸命、及大機弘宗諡号。所謂照先君令德者在是矣。本寺素為後醍醐帝香火之場、至勝定相公警蹕于天下、為豪貴所誣、而齒于十刹、痛哉。師應相府之命、滌篆本寺、一香供華叟。後聞於相府、寺復旧規。師奉敕黃、再董蒞此山。玄関山之徒宗舜、假威於細川源公、脅師欲住本寺。師堅拒之曰、靈山翁稟國師命、而排擠関山而後、其徒不印足跡於此山寺累三世。今也舜等、恣擅越之權、欲玷辱先師。吾門不幸、正在此時。蓋忤當權者隘也。凌蔑先師者、不恭也。隘與不恭、吾攸不取也。不如匿迹、且俟時焉。深栖止紀之山中、贄川公叡德禪院而居焉。其基趾盤礴于葛城山半腹、而態千状万風景可愛。紀見坂之高

下、也峭壁攢峰鍾秀、以為寺後主山、吉野川之隱顯、也曲渚回塘縷引、以為門前湖水。師嗜其勝槩、有終焉之志、自命於石工、雕刻其像、至今猶存矣。細川公累遣使招師。々確乎不出。公託播州山名金吾公、欲奪本寺資糧之地小宅庄。師云、重先師義、不與時俯仰、亦近于隘矣。弗獲已而皈本寺。一日火于本寺、師便移大用於瓦礫場、為雲門菴。師因垂示曰、如道、是法住法位、世間相常住、佛殿・山門向什麼處去。僧不契。師代曰、是法住法位、世間相常住。師再造大用之日、示衆曰、如武帝問達磨、朕建寺度僧、有何功德。磨云、無功德。老僧因甚建立一字、試下一轉語看。師代云、將此深心報塵刹。僧云、意旨如何。師云、恩大難酬。師平素之室圓其戶牖、曰圓相軒。非會中頭角、弗許入其室。師自安壽像於其中、以大用為華叟之塔。師常慨嘆云、吾兒孫、他日不當先師忌齋、第營吾忌齋矣、吾必與先師、同其忌辰、使兒孫配享、永々俱不斷絕也。果如其言。有宗歎者、以何州花田別業獻師。々不以為吾有、寄附本寺、為法堂再造之助緣。畢其功之日、一衆請師、陸堂祝聖、以賀落成。又肇泉南陽春、使師為鼻祖者、歎之請也。師之為人、敦愨柔易、論其宗才則、奔軼絕塵、使佛祖瞠。若乎後者也、其問答對機垂語等、不遑枚舉。後花園法皇、特諡宗慧大照禪師之号。師於長祿二年六月廿七日而迁化。書偈云、喝、末後一喝、具眼者辨取。連喝兩喝。擲筆坐化。於戲、父有正長、子有長祿、同其月其日、

『大德寺夜話』をめぐる(三)(飯塚)

匪苟然也。春秋八十三、僧臘六十七。嗣其法者、春浦熙・岐山揚・猷叟芳也。傑于三人者、但熙而已。前任大德禪寺法孫比丘宗真撰。

〔訓読〕

師諱は宗頤、字は養叟、藤氏に出づ。其家世々洛の東山靈山の麓に居す。年甫めて八歳、乳母、師を抱いて、東福正覺の室に詣つ。九峯和尚を拜して之れを師と為す。祝髮受具するに迄で、其の侍局を司る。後に建仁天潤庵に掛錫して、藏鑰典る。裔大周を土の吸江菴に攀鱗して、心空上人を播の書寫山に附翼す。所以に深く内外の典に頤う。再び建仁に還りて、雲の後版に書し、其の塵を乗って提唱し、人天を聳動す。天潤に老宿巨岳なる者有って、竜寶の範(宗施)大模に参見する也。有る日、師、諸の巨岳に私淑して、大模の道を聞くこと有り、頗る以て自負す。或は師に謂いて曰く、本を捨て末を取り、流れを尋ねて源を失するは、道の弊なり。方今大燈的裔にして言外の上足華叟和尚、江の安脇禪興精舎に韜光す。你若し千里を遠からずとして行かば、則ち豈に本を取り源を尋ぬるに非ずや。師、是の言を佩服して、即日、満足して其室に詣でて曰く、某得々として来るは、偏えに己事の為なり。和尚、豈に慈誨を惜しまんか。叟肯えて允容せず。師懇請すること數し、叟峻拒するを忍びずして曰く、吾れ先師亡じてより、佛法の二字を

口に忌むこと、殆んど二十年たり。何んぞ圖らん今日始めて你が為に落草せんとは。師、叟の炉鞴裡に於いて、百煉千煨すること、十有六霜を歴て、以って煨了底の金と作る。始めて知る、巨岳の処に於ける所得は、澄公が薬を求むるの銀なり。遂に印證を承けて、叟の的嗣となる。叟乃ち師に道称を授けて、養叟と曰う。其の偈に云く、祖宗門下の久參徹、充飽す、西來密旨の禪。推し得たり端無くも雪花の鬢、人に逢うて先ず語る旧因縁。師、叟の壽像を寫して賛語を需めて曰く、口は佛祖を呑み、眼は乾坤を蓋う。手裡の竹篋は、天魔を喪魂せしむ。一句語もて三要印を掲げ、頤い來つて的々兒孫に付す。叟は乃ち法衣一領を付して云く、吾が道你に至つて、大いに世に行われん。叟後に禪興庵より、塩津の高源院に遷り、師も亦た與俱にす。叟の順世するに逮んで、草菴を梅尾梅畑に結ぶこと二年、太だ單丁なり。竟に大徳に留錫して、金剛軒に僑居す。師の門弟、力を戮して大用菴を草創し、師の靈場と為す。師、朝に奏して、叟の為に本寺綸命及び大機弘宗の諡号を索む。所謂る先君の令徳を照すこと是に在り。本寺は素より後醍醐帝香火の場為り、勝定相公の天下を警蹕するに至つて、富貴に誣せられて、十利に齒なぢぶ、痛ましい哉。師、相府の命に應じて、本寺に濂篆(大徳寺)し、一香を華叟に供う。後に相府に聞えて、寺、旧規に復す。師、救黄を奉じ

て、再び此山に董蒞す。玄関山(勝元)の徒宗舜(日峰)、威を細川源公に假つて、師を脇にして本寺に任せんと欲す。師堅く之れを拒みて曰く、靈山翁は國師の命を稟けて、関山を排擯して後、其徒、足跡を此の山に印せざること三世に累ぶ。今も也た舜等、檀越之権を恣にして、先師を玷辱せんと欲す。吾が門の不幸、正に此時に在り。蓋し権に忤當するは隘なり。先師を凌蔑するは、不恭なり。隘と不恭と、吾れ取らざる攸なり。匿迹するに如かず。且らく時を俟たん。深く紀の山中に栖止す、贄川公、徳禅院を剋りて焉(ここ)に居せしむ。其の基趾は葛城山の半腹に盤礴して、態千状万の風景愛すべし。紀見坂の高下、也た峭壁攢峰の鍾秀、以て寺後の主山と為す。吉野川の隱蹟、也た曲渚回塘の縷引、以て門前の湖水と為す。師は其の勝槩を嗜みて、終焉の志有り。自ら石工に命じて、其像を雕刻せしむ、今に至つて猶お存せり。細川公、累ねて使を遣して師を招せしむ。師、確乎として出でず。公、播州山名金吾公に託して、本寺資糧の地小宅庄を奪わんと欲す。師云く、先師の義を重じて、時と俯仰せず、亦た隘に近し。已むことを獲ずして本寺に皈る。日本寺火にあう、師便ち大用を瓦礫の場に移して、雲門菴と為す。師因みに垂示して曰く、道うが如きは、是法住法位、世間相常住、佛殿・山門は何処(どこ)にか去る。僧契わず。師代つて曰く、是法住法位、世間相常住。

師再び大用を造するの日、示衆して曰く、武帝の達磨に問うが如きは、朕は寺を建て僧を度す、何の功德か有らん。磨云く、無功德。老僧甚に因ってか一字を建立す、試みに一轉語を下せよ看ん。師代って云く、此の深心を將って塵刹に報ゆ。僧云く、意旨如何。師云く、恩大にして酬い難し。師、平素の室は、其の戸牖圓なれば、圓相軒と曰う。會中の頭角に非ずんば、其の室に入るを許さず。師自ら寿像を其の中に安じて、大用を以って華叟の塔と為す。師常に慨嘆して云く、吾が兒孫、他日先師の忌齋を営まざらん。吾れ必ず先師と、其の忌辰を同じうして、兒孫をして配享せしめ永々に俱に断絶せしめざらん。果して其の言の如し。宗歛なる者有って、何州花田別業を以って師に獻ず。師、以って吾が有と為さず、本寺に寄附して、法堂再造の助縁と為す。其の功を畢えるの日、一衆師を請して、陞堂祝聖して、以って落成を賀す。又た泉南陽春を肇めて、師をして鼻祖と為さしむるは、歛の請なり。師の人為るや、敦慤柔易、其の宗才を論ずる則んば、奔軼絶塵、佛祖をして睦めいむかしむ。後者の若きは、也た其の問答・對機・垂語等、枚擧に違あらず。後花園法皇、宗慧大照禪師の号を特諡す。師、長祿二年六月廿七日において遷化す。偈を書して云く、喝、最後の一喝、具眼の者辨取せよ。連喝兩喝。擲筆して坐化す。於戲、父は正長に有り、子は長祿

『大徳寺夜話』をめぐって(三)(飯塚)

に有り、其月其日を同じうするは、苟然に匪るなり。春秋八十三、僧臘六十七。其法を嗣ぐ者、春浦熙・岐山楊・猷叟芳也。三人に傑たるは、但だ熙のみ。  
前住大徳禪寺法孫比丘宗眞撰す。

【参考資料(二) 江月宗沅撰『宗慧大照禪師行狀(仮題)』  
(孤蓬菴所藏『宗慧大照禪師養叟和尚語録』)】

師諱宗頤、字養叟、俗姓藤氏、生於平安城東山靈山麓。年甫八歳、詣東福寺正覺菴、拜九峯和尚為師。迄于祝髮受具、司侍局。後掛錫於建仁寺天潤菴、典藏鑰。又隨齋大周、遷土州之吸江菴、博學群書、且及探經頤。戾止播州書寫山、以依心空上人之講席。再還建仁、書雲節、居仰嶠版位、其秉拂提唱、晨昏篤志乎此道而已。參見巨岳和尚、而透過許多公案。自謂、已是足矣。法友謂師云、者裏不然。茲有大燈の伝・言外上足華叟和尚、久棲遲于江州安勝禪興菴。師若有肯諾、宜往參見。繇是、師乃發足。徑詣其室、問曰、某甲為要明此事、遙拜和尚來、許參請否。叟云、吾從得印證廿年、不道佛法二字。今日為爾始開口、云云。師從此十六年、朝參暮扣、辛勤不倦、領解深旨、始知從前虛用工夫、遂承印證、為華叟法嗣。叟乃付囑法衣云、吾道至汝、大行乎世也。師寫叟壽像、需實語。叟書云、口吞佛祖、眼照乾坤。手裡竹篋、天魔喪魂。一句語提三要印、頤來的々付兒孫。又出楮求號。号曰

養叟、賦一偈云、祖宗門下久參徹、充飽西來密旨禪。捱得無端雪花鬢、逢人先語旧因緣。叟一日從安脇禪興庵、遷塩津高源院、師亦相隨。叟化緣已終。師再至京師、掛錫于大德寺、暫居如意菴・金剛軒兩處。師承丞相公之命、視篆大德開堂演法。又董德禪丈室者三載。門弟費私肇艸創大用菴。後奉 敕黃、再端居大德方丈。師於華叟身後、奏朝奉 綸命、以大德之前住、拜諡大機弘宗禪師。于時宝徳四年六月廿七日也。師當本寺回祿時、革大用作雲門菴入開山塔也。乃因回祿、垂示曰、是法住法位、世間相常住。大德寺佛殿・山門、向什麼処去。師代曰、是法住法位、世間相常住。再大用建立之時、師垂示曰、如武帝聞達磨云、朕建寺度僧、有何功德。磨云、無功德。老僧因甚麼建立一字、試下一轉語看。師代曰、將此深心報塵刹。僧云、意旨如何。師云、恩大難酬。有宗歡者、以河州花田之古基、作財寄之。師以之、再興大德法堂。乃應一衆之請、陞座說法祝讚。宗歡復於泉南、肇營造一基、曰陽春菴、請師為第一祖也。師平生垂示・勸辨・問答・對機・說法・法語・贊語・頌古、惟多、不遑縷陳。師氣宇溫柔、道得無慚。迄發轉大機大用、雖宿德飽參、難當其鋒也。後華園法皇特諡宗慧大照師號。師一日、病牀染筆、書偈曰、喝、末後一喝、具眼者辨取。連喝兩喝。擲筆坐化。于時長祿二年六月廿七日也。閏世八十三、僧臘六十七。嗣其法者、春浦和尚・岐菴和尚・芳猷叟。所度眞俗不可勝計也矣。門人謹狀于梗

槩。

大照禪師者、天澤的流、而龍峯中興之活祖也。室中語要亦夥矣。吁、世乱道微兵燹不熄。聿失厥本録、不能觀全機。今幸點檢 殘纒得一二、以為語録。庶幾千歲于雲補其缺略而已。

于時元祿己卯季秋日、焚香拜書。

劣孫 宗沅 印

### 〔訓読〕

師諱は宗頤、字は養叟、俗姓は藤氏、平安城東山靈山の麓に生まる。年甫(は)じめて八歳、東福寺正覺菴に詣で、九峯和尚を拜して師と為す。祝髪受具するに迄(お)んで、侍局を司る。後に建仁寺天潤菴に掛錫して、藏鑰を典る。又た脩大周に隨つて、土州の吸江菴に遷つて、博學群書、且つ経頤を探るに及ぶ。播州書寫山に戻して、以つて心空上人の講席に依る。再び建仁に還り、書雲の節、仰嶠の版位に居して、其れ秉拂提唱す。晨昏此道に篤志するのみ。巨岳和尚に參見して、許多(そほ)くの公案を透過す。自ら謂らく、已に是れ足れり。法友師に云て謂いて、者裏は然らず。茲に大燈の的伝にして言外の上足華叟和尚有り、久く江州安脇禪興菴に棲遲す。師若し旨諾有らば、宜く往いて參見すべし。是れに繇りて、師乃ち發足す。徑ちに其室に詣でて、問うて曰く、某甲此の事をめめんと要せんが為に、遙かに和尚を拜し来れり、參請を許すや。叟云く、吾れ印證を得

て従り廿年、佛法の二字を道わず。今日汝が為に始めて開口せん、云云。師此れ従り十六年、朝參暮抄し、辛勤して倦まず、深旨を領解す。始めて従前の虚用工夫を知り、遂に印證を承け、華叟の法嗣と爲る。叟乃ち法衣を付囑して云く、吾が道汝に至って、大いに世に行れん。師叟の寿像を寫して、賈語を需む。叟書して云く、口は佛祖を呑み、眼は乾坤を照す。手裡の竹篋は、天魔をして喪魂せしむ。一句語もて三要の印を掲げ、頤い來つて的々兒孫に付す。又楮を出して號を求む。号して養叟と曰う、一偈を賦して云く、祖宗門下の久參徹、充飽す西來密旨の禪。捱得す端無くも雪花の鬢、人に逢うて先ず語る旧因縁。叟一日安脇禪興庵より、塩津高源院に遷る。師も亦た相隨う。叟化縁已に終る。師再び京師に至つて、大徳寺に掛錫して、暫く如意菴・金剛軒の兩處に居す。師丞相公の命を承けて、大徳に視篆して開堂演法す。又徳禪丈室を董すること三載、門弟私を費して肇めて大用菴を艸創す。後に救黄を奉じて、再び大徳方丈に端居す。師華叟の身後に於いて、朝に奏して綸命を奉じて、大徳の前住を以つて、大機弘宗禪師を拜諡す。時に宝徳四年六月廿七日なり。師本寺の回祿の時に當つて、大用を革めて雲門菴（開山塔なり）と作す。乃ち回祿に因んで、垂示して曰く、是法住法位、世間相常住。大徳寺佛殿・山門、什摩処に向かつて去る。師代つて

『大徳寺夜話』をめぐつて（三）（飯塚）

曰く、是法住法位、世間相常住。再び大用建立の時、師垂示に曰く、武帝の達磨に問うが如きは、云く、朕は寺を建て僧を度す、何の功德か有る。磨云く、無功德。老僧甚麼に因つてか一字を建立す、試みに一轉語を下せよ看ん。師代つて曰く、此の深心を將つて塵刹に報ゆ。僧云く、意旨如何。師云く、恩大にして酬い難し。宗歡なる者有り、河州花田の古基を以つて財を作し之れを寄す。師之れを以つて、大徳の法堂を再興す。乃ち一衆の請に應じて、陞座說法して祝讚す。宗歡は復た泉南に於いて、肇めて一基を營造して、陽春菴と曰う、師を請して第一祖と爲すなり。師平生の垂示・勘辨・問答・對機・說法・法語・贊語・頌古・惟れ多くして、縷陳するに遑あらず。師は氣宇溫柔にして、道得無慚なり。大機大用を發轉するに迄んで、宿徳飽參なりと雖も、其の鋒には當り難し。後華園法皇は、宗慧大照師の號を特諡す。師一日、病牀に染筆し、偈を書して曰く、喝、末後の一喝、具眼の者辨取せよ。連喝兩喝。擲筆して坐化す。時に長祿二年六月廿七日なり。世を関すること八十三、僧臘六十七なり。其の法嗣ぐ者は、春浦和尚・岐菴和尚・芳猷叟なり。度する所の眞俗は勝げて計うべからざるなり。門人梗槩を謹んで狀す。大照禪師は、天澤的流にして龍峯中興の活祖なり。室中の話要も亦た夥し。吁、世乱れ道微かにして兵燹熄まず。

聿に厥の本録を失す、全機を覩ること能わず。今幸に殘を點檢して纔かに一二を得て、以て語録と為す。庶幾わくは千歳に其の缺略を雲補せんことを。

時に元禄乙卯季秋日、焚香拜書す。

【参考資料(三)『正續大宗禪師行狀』(孤蓬菴所藏)『大弘禪師語録』所収)】

正續大宗禪師行狀

松源九世の孫、大照十笏真子、師諱宗熙、字春浦、播之赤松縣人、俗姓源氏、其母夢吞劍、覺有娠。幼而隨母入京。受業乎建仁乾心、心與師書云、爾六歲甫來、薙髮染衣、依附于余、々嘗夢白蛇吞珠而獻之、得爾。々神性端直、余從戊戌春嬰疾苦、起居不安、用汝為手足、用汝為股肱。凡董行之所不為、爾無不為也。磨礪欲作一顆寶珠。余思遠大期、而孜孜于學則、余願足矣。十八歲而受具、廿二歲司藏鑰于建仁。于皆大照禪師倡道於大徳。師傾誠入室、竟至二十四歲遷居大徳。其發足之日、跨建仁門限、預發誓者三。其一云、不為飢寒易志。二云、縱受人瞋拳、忍而作笑面。三云、若不究宗門闢奧、不中道而廢。自是日夕策勵、殆于忘寢食。一日需法諱。照云、你佗日到休歇田地、則不求而與之。師數日之後、瞥然

桶底脱矣。即呈偈云、佛祖全機沒可把、看來不直半文錢、春風枕上無閑夢、紅杏花前醉倒眠。照大喜為師諱之。師之處、衆糧虧、不接。司本寺持淨之職三年、一(夕)月(見)之落瓶水、忽爾會得馬祖不安公案。照又示衆、雲門闕字。師下教轉語、後投機云、韶陽一字関鎖重々、掉臂透過歩々清風。師逮侍雲門祖塔之日、有僧問云、已是侍雲門、未審、具透関眼麼。師曰、你喚甚麼作透関眼、速道々々。僧擬議。師驀口與一掌曰、去々西天路、迢々十萬里。又僧問、師唱誰家曲。師曰、金風吹玉管、那箇是知音。僧作聽勢。師曰、耳聽如聾。僧云、與麼則學人退身三步。師曰、蚊蚋弄空裡猛風。便打。自餘對機勘辨束之高閣。照授春浦号之偈云、氣入千林處々花、光沈萬水家々月。若逢作者須為人、明眼衲僧莫輕忽。囑々又付囑法衣之書云、華叟先師法衣一領傳來、付與宗熙首座。可為滴水滴凍之證。照將順世為師書云、宗熙首座隨侍老僧、年深日久、參禪徹矣。如一器水傳一器。宜為法中第一者也、云々。為其師被許可如此者、古未之有也。爾來、菴于東山祇園之側、曰大蔭。學徒麁至、守大用先廬之日、奉綸命視篆本寺、實寬正辛巳仲冬十四日也。明年七月十六日退居大蔭。台府勝山大居士為亡夫人善室大師創建妙雲院、令子通玄尼寺竺英長老奉鈞旨、革妙雲院作養徳。々々蓋贈号于勝山、請師居焉、資薦其冥福矣。師避應仁之騷乱、憩止于接(撰)之城福寺、不幾復應衆請、赴泉南陽春庵、一住八稔。本寺權官軍兵燬而



〔訓読〕

正續大宗禪師行狀

無餘燼可拾。一衆戮力、紫野之外綿蕪于城中。事聞于朝。々請師再住、山復舊規矣。移東山養德於（於）城北、與龍翔祖塔乎百廢之餘者、皆師之力也。文明十三年秋相攸伏見潛邸、卓箇菴尼、鉏灌乎荆棘、平砥乎嶮崖、而茅不剪椽不斷、扁以清泉。南面榜江山一覽、傍構宿鷺亭、而樂其佳境。一歲之間、往來者數矣。後於靈山祖塔之西隅、草創松源院、其落成偈云、院扁松源寄短椽、將三轉語不論禪、半窓三色四檐竹、遮莫曩無省數錢。

後土御門院、欽其風特賜正續大宗禪師號。及師之病篤、拈拄杖告衆曰、這木上座遊戲神通、常在家舍不離途中、有時拄天拄地、有時作蛇作龍、死活循然、口吞佛祖、與奪自在、牙咬大蟲、臨行添得腕頭力、擊碎華山千萬峰。喝一喝。又云、老僧火浴之後、莫造石塔。仍留以一偈云、全身無舍利、臭骨一堆灰、掘地深埋處、青山絕點埃。喝一喝。明應五年丙辰正月十四日順寂。遺偈云、倚天長劍、急磨刃來、祖佛俱殺、五逆聽雷。冷笑一聲擲筆而逝。其剋行道地者三處、以松源為基本也。師世壽八十八、法齡七十一。按其始卒、廉謹嚴毅、眇觀天下、不肯以言。假人雖貴胄豪族、耆年碩德、皆芒背泚頰矣。家法森嚴、槌拂不倦、寔為一代宗匠。吁、見師其猶龍邪、壯歲奮發、跨東山之門、則啓蟄戶、晚年入龍寶之門、則敲法雷。豈乾心室中白蛇、不改其鱗乎。予親炙于師也尚矣。其攸聞見者、纔四五于十矣。以為他日、銘乎塔之草云。

松源九世の的孫、大照十笏の真子、師諱は宗熙、字は春浦、播の赤松縣の人、俗姓は源氏、其の母夢に劍を呑み、覺めて娠むこと有り。幼して母に隨いて京に入る。建仁の乾心に受業す、心は師の與に書して云く、爾六歳にして甫めて來り、薙髮染衣して、余に依附す。余嘗て夢に白蛇の珠を呑みて之れを獻じ、爾を得たり。爾が神性端直、余戊戌の春從り疾苦に嬰る、起居不安にして、汝を用つて手足と為し汝を用つて股肱と為す。凡そ童行の為ざる所、爾の為さざる無きなり。礪を磨きて一顆寶珠と作さんと欲す。爾、遠大なる期を思いて、學に孜々たる則んば、余が願い足れり。十八歳にして受具し、廿二歳にして藏鑰を建仁に司どる。時に大照禪師道を大德に倡う。師誠を傾けて室に入る。竟に二十四歳に至つて大德に遷居す。其の發足の日、建仁の門を跨ぐ限り、預じめ誓を發すること三あり。其の一に云く、飢寒の為に志を易えざること。二に云く、縦い人に瞋拳を受くるとも忍びて笑面を作すこと。三に云く、若し宗門の鬪奥を究めずんば、道に中りて廢せざること。是れより日夕に策勵して、殆んど寢食を忘る。一日法諱を需む。照云く、你佗日休歇の田地に到らば、則ち求め

ずとも之れを與えん。師、数日の後、瞥然として桶底を脱せり。即ち偈を呈して云く、佛祖全機把るべき没し、看來れば半文錢に直らず、春風枕上に閑夢無し、紅杏の花前醉倒して眠る。照大いに喜びて師の爲に之れを諱す。師の處、衆の糧を虧きて、接せず。本寺持淨の職を司どること三年、一夕、月の瓶水に落つるを見て、忽爾として馬祖不安の公案を會得す。照も又た衆に雲門の関字を示す。師數轉語を下して、後に投機して云く、韶陽の一字関鎖重々、掉臂透過して歩々清風。師雲門祖塔に侍するの日に遠んで、有る僧問いて云く、已に是れ雲門に侍す、未審、透関の眼を具するや。師曰く、你甚麼をか喚んで透関の眼と作す、速に道え々々。僧擬議す。師驀口に一掌を與えて曰く、去き去きて西天の路、迢々たり十萬里。又僧問う、師誰家の曲をか唱うる。師曰く、金風玉管を吹き、那箇か是れ知音。僧聽く勢を作す。師曰く、耳に聴きて聾の如し。僧云く、與麼ならば、則ち學人退身三步。師曰く、蚊蚋空裡に猛風を弄せり。使ち打す。自餘の對機勘辨、之を高閣に束ぬる。照、春浦の号を授くるの偈に云く、氣は千林に入る處々の花、光は萬水に沈む家々の月。若し作者に逢わば須く為人すべし、明眼の衲僧忽にすること莫れ。囑々して又た法衣を付囑するの書に云く、華叟先師の法衣一領傳え來て、宗熙首座に付與す。滴水滴凍の證と為すべし。

照將に順世せんとして師の爲に書して云、宗熙首座老僧に隨侍して、年深く日久しく、參禪徹せり。一器の水を一器に傳うる如し。宜く法中の第一爲るべき者なり、云々。其の師に許可せらるること此の如きは、古えより未だ之れ有らざるなり。爾來、東山祇園の側に菴して、大蔭と曰う。學徒むら響びやうり至る。大用先廬を守るの日、綸命を奉じて本寺に視篆す、實に寛正辛巳仲冬十四日なり。明年七月十六日、大蔭に退居す。台府勝山大居士、亡夫人善室大師の爲に妙雲院を創建す、令子通文尼寺竺英長老、鈞旨を奉じて、妙雲院を革めて養徳と作す。養徳は蓋し勝山の贈号なり、師に焉に居せんことを請い、其の冥福に資薦とす。師應仁の騒乱を避けて、接(撰)の城福寺に、憩止す。幾くならずして復た衆請に應じて、泉南の陽春庵に赴き、一住八稔たり。本寺へ大徳寺へ、官軍の兵燬に罹りて拾うべき餘燼無し。一衆力を戮して、紫野の外、城中に綿蕪す。事、朝に聞こゆ。朝、師に再住を請し、山(龍寶山大徳寺)を舊規に復せしめんとす。東山養徳を城北に移し、百廢の餘に龍翔祖塔を興すは、皆な師の力なり。文明十三年秋、伏見潛邸を相攸して、菴兒を卓箇す。荊棘を鉏灌し、嶮崖を平砥し、茅を剪らず椽を斷たず、扁するに清泉を以てす。南面に江山の一覽を傍げ、傍らに宿鷲亭を構えて、其の佳境を樂しむ。一歳の間に往來すること數(多)なり。後に靈山祖塔の

西隅に、松源院を草創す。其の落成の偈に云く、院は松源と扁して短椽に寄せ、三轉語を將つて禪を論ぜず、半窓三色、四檐の竹、遮莫れ曩なまもろはなに省數錢の無きを。

後土御門院、其の風を欽びて正續大宗禪師の號を特賜す。師の病篤きに及んで、拄杖を拈じて衆に告げて曰く、この木上座、遊戲神通、常に家舎に在つて途中を離れず、有る時は天を拄え地を拄え、有る時は蛇と作り龍と作り、死活循環たり。口に佛祖を呑み、與奪自在にして、牙大蟲を咬む、行に臨んで腕頭の力を添得て、崑山の千萬峰を擊碎す。喝一喝。又云く、老僧火浴の後、石塔を造すること莫れ。仍て留るに一偈を以つて云く、全身舍利無く、臭骨一堆の灰、地を掘り深く埋むる處、青山點埃を絶す。喝一喝。明應五年丙辰正月十四日順寂す。遺偈に云く、天に倚る長劍、急に磨刃し來り、祖佛俱に殺し、五逆聽雷す。冷笑一聲し擲筆して逝く。其の窺めたる行道地は三處、松源を以つて基本と為す也。師の世壽は八十八、法齡は七十一。其の始卒を按ずるに、廉謹嚴毅にして、天下を眇觀して、肯えて言を以つてせず。貴胄豪族、著年碩徳なりと雖も、皆な背に芒あるがごとく類に泚す。家法森嚴にして、植拂を倦まず、寔まこととに一代の宗匠為り。吁、師を見るに猶お龍のごとく、壯歲に奮發して、東山の門を跨ぎ、則ち蟄戸を啓き、晩年に龍寶の門に入りて、則ち鼓法雷のごと

し。豈に乾心室中の白蛇、其の鱗を改めざらんや。予、師に親炙すること也た尚し。其の聞見する攸とくち、纔かに十のうちの四五なるのみ。以て他日、塔に銘するの草に為さんと云う。

前任大徳禪寺法孫比丘宗真謹んで撰す。